

# 持続可能なコミュニティを作るための 場のデザインに関する一考察

辻 寛<sup>1</sup>

<sup>1</sup>非会員 大阪大学特任助教 COデザインセンター (〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-16)

E-mail: tsuji@cscd.osaka-u.ac.jp

近年少子高齢化や人口減少に起因する社会課題解決のため、「(人との)つながり」が注目されている。多世代交流の機会を増やすため、自然災害後の地域再生のためにも「つながり」を創出する「場」が重要視されている。「場」に継続性、持続性が備わると「コミュニティ」に変化すると考えられるが、従来の地縁型コミュニティ、近年注目されているテーマ型コミュニティとも継続性、持続性に課題を抱えている。

本稿は、イギリス・ウェールズのカーディフ市で行われた6ヶ国対抗ラグビーの国際試合当日のまちなみを通じ、ウェールズにおけるラグビーを介した人々のつながりを創出する場を観察し、それより見出した持続的なコミュニティを作るための「場のデザイン」の一助を示すことを試みたい。

**Key Words :** design of “BA” field, sustainable community, networking, wales, rugby

## 1. はじめに

近年日本社会は、少子高齢化、人口減少に起因する社会課題解決のため、「(人との)つながり」が注目されている。多世代交流の機会を増やすため、多発する自然災害後の地域再生を進めるためにも「つながり」を創出する「場」が重要視されている。「場」に継続性、持続性が備わると「コミュニティ」に変化する。今日コミュニティは、地理的な地域を基盤とした「地縁型コミュニティ」と、「同じテーマに興味を持つ人たちのつながり」である「テーマ型コミュニティ」の二つがある<sup>1)</sup>。

「地縁型コミュニティ」の長所は、行政とのつながりや地域を基盤とする自治会や子ども会といった活動<sup>2)</sup>なので、その地域で生活する人たちの顔が見え、緊急時には効果的に機能する。またその反面、人間関係が緊密であることや、平常時のさまざまな協同作業が負の要素と捉えられている。そのしがらみは疎まれ、高度経済成長期以降、都市部に仕事を求め移住する人が増えた<sup>3)</sup>。都市部では地縁型のつながりを避ける人たちが、地方部では少子高齢化や人口減少により、地縁型コミュニティは衰退しつつある<sup>4)</sup>。

一方「テーマ型コミュニティ」は、従来の土地に根付いた共同体としてのつながりではなく、共通のテーマにより緩やかにつながりを持つコミュニティである。MacIver が定義した「アソシエーション」と考えること

ができるだろう<sup>5)</sup>。2008年厚生労働省は、地域課題に取り組むテーマ型コミュニティと言える住民団体やNPOによる活動を推奨し、地域共助の新しい形を確立することを示している<sup>6)</sup>。滋賀県草津市で行われたアンケートによると、テーマ型コミュニティの参加者は、関心のあるテーマについて主体的に活動するが、彼らの主たる目的は共通のテーマを通じた仲間づくりである<sup>7)</sup>。それに加えて、地域課題に取り組むことにはあまり重きを置いていない<sup>7)</sup>。また、それら組織は、マネジメントや地域とのつながりが希薄であること、組織立ち上げ者の意向が強く後継者が育たないこと、参加者の関わり方も世代により違っていることなどの課題を孕み、組織の持続性に疑問が残る<sup>8)</sup>。地縁型コミュニティ、テーマ型コミュニティ双方がお互いに補い合うことで新たな地域共助の枠組みを厚生労働省は提言しているが、両者の間の目的やモチベーションの違いにより対立の図式があることは否めない<sup>9)</sup>。

この二つのコミュニティ間にある対立の構図を解消するためには、それぞれのコミュニティが目的するものやテーマを相互に理解することが必要となる。辻らは対立の構図を解決するために、互いを理解し、理解しようと試みるモデレーションの必要性を説いている<sup>10)</sup>。地縁型コミュニティにしる、テーマ型コミュニティにしる、参加者の世代の違いにより、参加の目的やテーマは違っている。浅野らは、60～70代の参加者は活動趣旨に賛

同していることが目的となっているが、30～40代は子供の教育や興味を満たすことが目的となっていると述べている<sup>11)</sup>。その理由は、世代により価値観や特徴、テーマに対する考え方が違って来るからだと推察される。主な世代の特徴は、団塊世代と呼ばれる70代は競争意識が高く仲間意識も強いが、30代であるミレニウム世代はデジタルネイティブでありプライベートを重視し、周囲の評価を気にするとされる<sup>12)</sup>。

このような世代間の価値観の違いは日本だけではなく、イギリスでも同様な傾向が見られる。団塊世代と同じ年代であるベビーブーマーは理想家でひねくれておらず、十分な福祉政策の恩恵を受けている世代であり、ミレニウム世代はデジタルネイティブであり、オンラインでのコミュニケーションを多用する<sup>13)</sup>。そのようなイギリスのウェールズにおいては、第2章で論じるが、世代間の共通のテーマとなり得る国技「ラグビー」がある。筆者、はカーディフ市内の公園で女子高生チームの本格的な試合に遭遇したことがある。そこでは選手家族や友人がグラウンドを取り囲み、熱心に応援をしていた。また、昨年行ったウェールズ大学学部生や卒業生へのインタビュー調査でも、週末に行われているリーグに加わり、プレーをし、応援に行くと述べていた。これらのリーグは同世代だけでなく、世代を越えた人たちが集まり、チームを形成している。これらは、ウェールズで生活する人たちの間にラグビーを介したアクティビティを共有する場があることを示している。言い換えれば、「ラグビー」というテーマを共有することで、世代を越えて「つながる」ことができていると推察される。

本稿は、国際試合「6ヶ国対抗ラグビー」の試合日「インターナショナルディ」のまちなの様子を通して、ウェールズにおけるラグビーを介した人々のつながりを創出する場を観察し、持続的なコミュニティを作るための「場のデザイン」の一助を示すことを試みたい。

本稿は、次章で基本的なウェールズについて記述した後、ウェールズとラグビーのつながりを記述する。第3章は、筆者が本年2019年2月23日にウェールズ・カーディフ市で開催された6ヶ国対抗ラグビーのホームゲーム「インターナショナルディ」当日の市内中心部、及び周縁部の人びとが集まる場の観察、調査について記述する。第4章では、その調査から導き出された事柄を記し、最終章では、その調査のまとめと、ウェールズにおけるラグビーを媒介としたコミュニティを作るために必要とされる要因の一つを示すことを試みる。

## 2. ウェールズとラグビー

### (1) ウェールズについて

ウェールズはイギリス（グレートブリテン島）南西部位置し、人口は、約3.1百万人、面積は、20,540km<sup>14)</sup>

を有する。イングランドと比べ、国土全体が山地または、丘陵地であり、平野部が少ない。そのため、南北の交流が困難であり、現在も南北を直接つなぐ鉄道も高速道路もない。



図-1 ウェールズ地図<sup>14)</sup>



図-2 ウェールズ位置<sup>14)</sup>

ウェールズの歴史は15世紀後半までは各地の地主やジェントリによる自治が行われていた<sup>15)</sup>。その後16世紀半ばからイングランドの法律に則り統治されるが、イングランド国王が役人や封建貴族を通じて行使する権力を除いてはそれまでのように各地域の有力者により治められていた。これも地勢的な要因が大きいと思われる。ウェールズは政治的な国家としてはまとまっていなかった<sup>16)</sup>。しかし、言語、文化、伝統は統一的な原則が存在していたため、イングランドとは異なる一つの地域とし

て成立している。ウェールズが一つの地域としてまとまり始めたのは、18 世紀後半から始まる産業革命が大きく影響している。ウェールズは石炭、銅、鉄を始めとした豊富な天然資源を産出し、それらを用いて工業化が進み、労働者、製造物の移動に伴うインフラ整備が急速に進んだ。産業革命は殊にウェールズ南東部で発達し、集積所としてカーディフはウェールズ最大のまちとして急激に発展した<sup>17)</sup>。1998 年ウェールズ政府法によりウェールズ議会が南東部のウェールズ最大の都市カーディフに置かれ、カーディフはウェールズの首都として政治、経済、文化の中心としてこの 20 年あまり成長を続けている<sup>18)</sup>。

## (2) ウェールズとラグビーについて

ウェールズではラグビーを国技として扱っている。その国技とする理由は次の 4 点が挙げられる<sup>19)</sup>。① 産業革命時に支配階級の自尊心やエリート意識と仲間であることの証、② 産業革命時に労働者の不満のはげ口としての運動行為、③ ラグビーの起源がウェールズ伝統球技 CNAPAN (シナパン)<sup>注</sup>りであるという誇り、④ ラグビーであればイングランドと対等に戦える、即ち、ウェールズ人としてのアイデンティティの確認。

産業革命以前より各地の地主やジェントリの子息は、イングランドのパブリックスクールへ進学していた。そこでラグビーやクリケットなどのスポーツを習得し、ウェールズに戻った後、クラブを結成しプレーをした。それが、ウェールズ上流社会にスポーツが根付くきっかけになった。次に、産業革命に入るとウェールズのみならず、イングランドを始めとした各地から大量の労働者が流入した。資本家は労働者が抱えるストレスを軽減させるために、町ごとにチームを作り、労働者のありあまる体力を消費するためラグビーを推奨した。それは、労働者の資本家への不満を抑制する意図もあった。第三に、ウェールズ人は、古くから伝わる伝統的球技 CNAPAN (シナパン) がラグビーのルーツであると信じている。世界的に知られているラグビー発祥説を否定的に捉え、ウェールズがラグビー発祥地であることに誇りを持っている。最後に、16 世紀半ば以降大国イングランドに統治されており、言語を始めとして文化を蔑まれてきたウェールズ人には、ラグビーは対等に戦える機会であり、勝利することは自国を鼓舞することになる。ウェールズ人としての誇りを確認するために、ラグビーは大きく寄与しているといえる<sup>20)</sup>。

現在では、男性だけでなく、女性もプレーをする。昨年度のインタビュー調査においてもそのような記述が確認された。また、次章で述べる現地調査の際、女子高校生が本格的に試合を行い、多くの父兄が観戦している風景を目撃した。ゆえに、ウェールズ人にとってラグビー

は大きな意味を持ち、地域に根付いていることが推察される。

## 3. ウェールズにおけるラグビー 「インターナショナルディ」の観察から

本章では筆者が本年 2019 年 2 月 23 日にウェールズ、カーディフ市で行われた 6 ヶ国対抗ラグビーのホームゲーム「インターナショナルディ」における調査について記述する。

### (1) 6 ヶ国対抗ラグビーと「インターナショナルディ」

6 ヶ国対抗ラグビーは、イギリス国内の 3 地域 (イングランド、スコットランド、ウェールズ)、アイルランド (北アイルランドを含む)、フランス、イタリアの 6 ヶ国で毎年 2 月から 3 月に 5 週に渡って行われる国際試合である。1883 年にイングランド、スコットランド、ウェールズ、アイルランドの 4 ヶ国 (ホームネーションズと呼ばれる) で始まり、136 年の歴史がある<sup>21)</sup>。

「インターナショナルディ」は、6 ヶ国対抗ラグビーの試合が開催される日のことである。ラグビーでは国際試合を「テストマッチ」と呼び、この日を「テストマッチ」と呼ぶこともある。

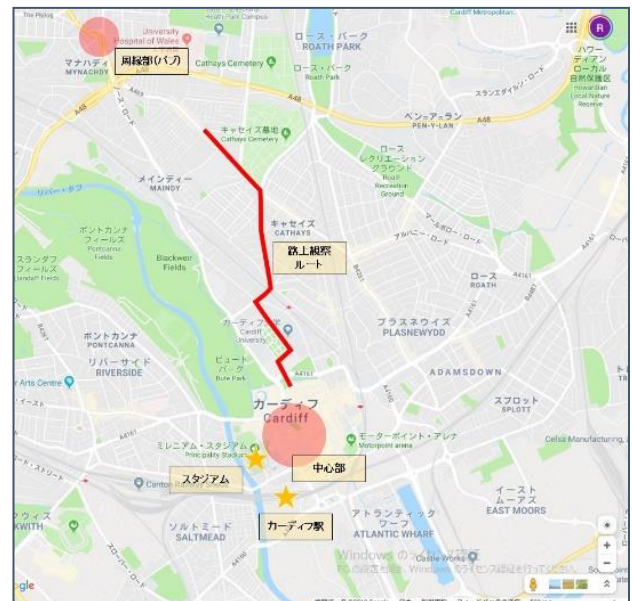


図-3 調査箇所相関地図 (筆者作成)

### (2) 「インターナショナルディ」当日の様子

筆者は「インターナショナルディ」当日、市内中心部の歩行者エリアとパブ、周縁部のまちとパブを合計 9 時間に渡り観察を行った。

#### ①市内中心部

筆者は試合前日にカーディフ大学で行った予備調査の

際、事前情報として試合当日は試合開始時間の数時間前から市内中心部は混雑すると聞いていた。それ故、試合開始4時間前にパブが立ち並ぶ市内中心部へ行った。そこはすでにウェールズ、イングランド両国のレプリカユニフォームやナショナルカラーを身に纏った人たち、フェイスペインティングを施した人たち、応援グッズを手にした人たちが溢れ返っていた。そのほとんどは大人であって、子どもの姿はほとんど見られなかった。サッカーの試合（ダービー戦）で見られるような「一瞬触発」という雰囲気ではなく、長年のライバルチームを迎えてはいるが友好的でお祭りムードが溢れていた。

カーディフにイングランドを迎え入れるのは 2017 年以来 2 年ぶりとなるので、ウェールズから離れて暮らしているウェールズ人も帰郷し、インターナショナルディ「イングランド戦」というウェールズ人にはとても意味のある日を「祭」として愉しんでいるように思われる。筆者は中心部へ来る途中周縁部にてウェールズのレプリカユニフォームを着た中心部へ向かう人たちを目撃した。カーディフ市に住んでいる人たちも中心部での「お祭りムード」を愉しんでいると思われる。また、試合のチケットを持っている地元住民も試合開始時間前に中心部へ繰り出し、この場を愉しんでいると思われる。しかし、試合開始数時間前から中心部で「祭」を愉しむ人たちの多くは、遠方からの来訪者、この機会に帰郷してきたウェールズの人たちとイングランドサポーターであると思われる。

中心部のパブは広場と同様に、試合開始数時間前より入場規制がかかるほど混雑していた。店内には広場と同様に、ウェールズ、イングランド両国のレプリカユニフォームやナショナルカラーを身につけた客で溢れており、ドリンク販売カウンターも芋の子を洗うような状態だった。店内の客層は 20 代から 40 代の男性が多く見られ、女性客は男性とともに来店しているようであった。女性客だけで来ている姿は見かけなかった。そして、サッカーであれば、ホームチームとアウェイチームのサポーターが同じ店に居ることはまずない。たとえ同席したとしても友好的な雰囲気はないだろう。ところが、この場ではそのような危険な雰囲気は感じられず、友好的で愉しくアルコールを飲み歓談している様子が見受けられた。

筆者が入店したパブは、試合会場であるスタジアムと目と鼻の先の距離であることから、試合開始時間近くまで多くの人たちはパブで飲んでいただと思われる。ところが、試合開始時間 30 分前でも店の外には入店を待つ長蛇の列が続いていた。パブ内で試合を観戦する人たち、すなわち、観戦チケットを持っていない人たちの行列だと思われる。

市内中心部は「お祭りムード」を愉しむ人たちが溢れた場であった。

## ②市周縁部

筆者は市中心部へ向かう前に、中心部から約 1~2km 離れた周縁部を歩き、まちの様子を観察した。いくつかのパブの店頭には試合を放映する旨の看板が出されていた。また、試合開始まで 4 時間半以上も前であるにも関わらず、常連と思しき人たちが店内に入って行く様子も見られた。アルコール（ビール）を大量に購入するためにパブに入って行ったとも思われる。また、酒類を販売しているスーパーマーケットもかなり賑わっており、ここでも大量のビールを購入している人たちを多数見かけた。彼らはパブへは行かず、自宅、もしくは友人宅で試合を観戦するのだと思われる。

彼らは、自宅、もしくは友人宅で、大きな試合をテレビで観戦するというイベント事と気の置けない家族や友人と共有する時間の両方を同時に愉しむ選択をしているのだろう。

周縁部のパブは中心部のそれとは違い、レプリカユニフォームやチームカラーを見に纏った人たちは見られず、また騒々しくもなかった。このパブは、中心部から約 3km の距離にあり、近くに大学や病院がある比較的優良な郊外住宅地に立地している。近隣に住む人たちが普段の週末のようにパブに集い、普段のようにモニターに映るスポーツを観戦しながら顔見知りと時間を共有するという状況である。その場に居る人たちの年齢層は比較的高く、40 代から 60 代の男性、女性、見た限りでは 7 対 3 ほどの比率で、テーブル席はほぼ埋まっていた。テレビ画面に映る試合を見るだけでなく、同席している家族、友人とアルコールを飲み、食事を取りながら歓談していた。「いつもの週末」といった様子であった。

試合前半はイングランドが優勢であり、一人の女性客はイングランドが得点すると歓声を上げていた。しかし、ウェールズ人と思われる人たちは特にアクションを起こすこともなく、淡々と時間を費やしている。その場にいる人たちは今年のウェールズチームは後半が強いことを知っているようなので、落ち着いて観戦しているのだと思われる。予想通り後半にウェールズは得点を重ね、勝利した。しかし、パブ内の客はそれほど興奮することもなく、勝利することが当然かのような光景であった。

ここでは、中心部のパブのような「お祭りムード」に覆われた場所ではなかった。

## 4. 本調査から導き出された事柄

### (1) 市内中心部

市内中心部は、多くの人が集まり易い場所である。試

合会場であるスタジアムが他の都市とは違い中心部に立地している<sup>22)</sup>。鉄道駅も中心部にあり、全てがコンパクトに揃っている。(図4)そのため、初めてカーディフを訪れた人であっても容易に移動できる。

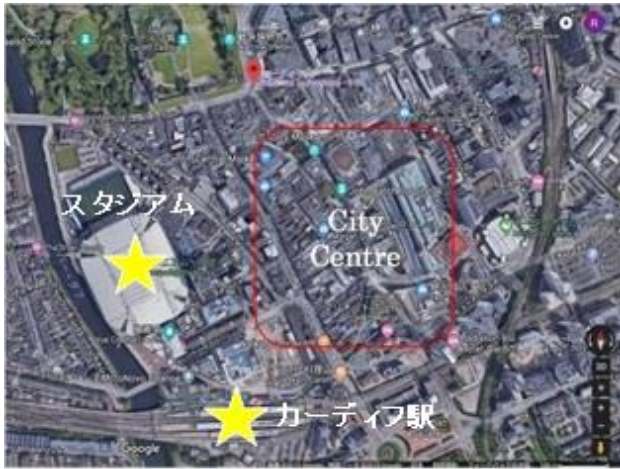


図4 カードィフ中心部地図 (筆者作成)

この日市内中心部には、観戦チケットを持つ約7万人を越える人たちが居たと思われる。(スタジアムの収容人数は最大74,500人<sup>22)</sup>で、この日の観客数は73,931人であった<sup>23)</sup>。) その半数近くはイングランドを応援する人たちだと想定すると、約3万人の人たちがイングランドからの来訪者であろう。またこの機会にカーディフへ帰郷した人たちも多数居たと思われるので、約5万人の来訪者がカーディフに集まったと思われる。それ以外に、お祭りムードを愉しむことを目的として集まった人たちも居たと思われる。たとえチケットを持っていなくても、試合前の高揚した雰囲気の中に身を置くこと、そして、ラグビーという共通の話題で盛り上がる場に身を置くことは、周囲との一体感を得ることができる。インターナショナルディという特別な日、「祭」であるラグビーの国際試合、その中でもホームであるウェールズにイングランドを迎え入れるという2年に一度の機会は、否が応でも場を盛り上げる。

場が盛り上がるその背景は、ウェールズとイングランドの何百年にも及ぶ歴史的な理由と、18世紀中頃以降の産業革命以降に発展したラグビーにおけるライバルティが関与する。

歴史的経緯としては、700年以上に渡りウェールズは自治権をイングランドに剥奪されていた(1997年住民投票、1998年ウェールズ政府法によりウェールズ議会創設まで)<sup>24)</sup>。加えて、18世紀中ごろ以後、産業革命時には鉱物資源の輸出や加工により南東ウェールズは急速に発展をしたが、多くの資本家はイングランド人であったためウェールズへの恩恵は多くなかった。そして、同時期多くの労働者がウェールズに仕事を求めて移り住んだことにより、事実上英語が共通言語になった<sup>25)</sup>。そ

れにより、カーディフを含む南東ウェールズ地域でのウェールズ語の衰退は顕著となった<sup>26)</sup>。ウェールズ固有の文化の衰退と大国イングランドの影響はウェールズ人に大きな影を残したと言えよう。そのような中、ウェールズ人にはラグビーだけが大国イングランドと同等、またはそれ以上として対抗することができるものとなった。136年に渡る両国のラグビーでのライバルティは均衡している<sup>27)</sup>。1977年の試合前にウェールズの伝説的なプレイヤー、フィル・ベネットが発した言葉は今でも語り継がれている。

「よく聞け、やつらがウェールズに何をしてきたか!やつらは俺たちの石炭、水、鉄を奪っていきやがった。やつらは俺たちの家を買ひ、毎年2週間だけそこに住む。俺たちに何かをくれたか?全くを持って何も無い。俺たちはイングランド人に搾取され、犯され、支配され、痛めつけられてきた。そして、今から俺たちが戦うのはそんなやつらとだ!」<sup>28)</sup>

このような思いが、年に二度か三度あるインターナショナルディ、ホーム・カーディフでの試合、中でもイングランド戦は特別なものであることが理解できる。イギリス国内のみならず世界各地で生活をしているウェールズにルーツを持つ人たちにとって、ホーム・カーディフに迎えるイングランド戦はまさに特別意味のある「祭」であることが伺えよう。そして、その「祭」に加わるため、カーディフに帰郷し、ラグビーのみならず、帰郷したことを自ら祝う人たちでより賑やかさを創出していると思われる。

インターナショナルディで賑わう市内中心部は、熱烈的ラグビーファンの熱気が溢れており、特別な日のイベントを愉しむ場である。彼らの多くは来訪者だと思われる。しかし、ただその晴れやかな雰囲気を愉しむために集まっているのではなく、その場に集った人たちは、ラグビーを、そしてラグビーにまつわるウェールズとイングランドの関係性を知る人たちである。そこに物語があるからこそ、二年に一度の特別な日を思う存分に愉しんでいると考えられる。

## (2) 市周縁部

筆者が歩いた市周縁部は、市内中心部へも大学キャンパスへも近く、若者が賃貸で住む家が多くある地区である。そこに住む人たちの自宅、もしくは友人宅といった場所は、親密な人のみで構成される場と考えられる。近隣に住む親族や友人、片や遠方に住むそれらが「インターナショナルディ」という特別なイベントを理由として集まる「場」である。招待するものされるものが互いに知り合いであるという親密性がそこに存在すると考えられる。

その地区で酒類を購入している人たちは20代半ばか

ら 30 代前半の男性が多く見られた。彼らはいわゆる「ミレニアム世代」であり、社会的な要因（高いインフレと上がらない賃金）から外出にかかる費用は比較的少ないと報告されている<sup>29)</sup>。そのような世代の人たちは、パブといった社交的な場所へ出向くよりも、自宅や友人宅で過ごすことを選択すると言われている。

またカーディフにはウェールズ内からだけでなく、イギリス国内のみならず外国からの学生やここ十数年比較的景気が好調であるため仕事を求めて移住して来た若者が多く暮らしている。彼らは、自宅や友人宅でラグビー観戦を介して（スポーツを媒介として）、言語や方言を含めた価値観を共有することができる親しい友人とともに、（ビールを飲みながら）楽しい時間を共有していたと推察される。また、イングランド出身者は、アウェイであるカーディフのローカルパブであからさまにイングランドを応援することを遠慮しているのかもしれない。そのような理由から彼らは自宅や友人宅を選択していると考えられる。

そしてこの世代はその特徴の一つとして「デジタルネイティブ」と呼ばれている。彼らはソーシャルメディアを介して、共通の話題を持った仲間とバーチャルな場でのコミュニティを発展させている<sup>30)</sup>。この日もソーシャルメディアを介してバーチャルな場でのコミュニケーションを愉しんでいた可能性も考えられる。

周縁部のまちに暮らす人々は、この地域が市内中心部に隣接しているにもかかわらず、「祭」の場に赴かず、自宅や友人宅で親類や友人と過ごしている。彼らは、インターナショナルディを「旧交を温める機会」として用いている。加えて、筆者が目撃した人たちの多くは 20 代から 30 代の人たちであった。彼らはミレニアム世代と分類され、その特徴の一つとして、ソーシャルメディアを介したコミュニケーションを多用するというものがある。ゆえに、一見すると彼らは少人数で集まっていると思われるが、ソーシャルメディアを介したバーチャルな場で多くの人と交流している可能性も考えられる。今回の調査ではその部分まで踏み込むことはできなかった。今後機会を設けてバーチャルな場に関する調査を行う必要があるだろう。

一方筆者が訪れた周縁部に立地するパブは、市内中心部から 3km を少し越える地区にある場所である。その場所へ行くためにはバスに乗る必要があり、それに関する情報を知らなければ行くことができない。このパブが何らかの理由で名の知れたパブであるといった訪問先としての明確な理由がない限り、外部からの来訪者は足を運ぶことはないだろう。従って、パブ内に居た客のほとんどは、近隣住民であり、常連客であると推察される。このパブは中心部のパブとは違い、普段の週末とさ

ほど変わらない常連客が集まる場だと考えられる。通常週末であれば、何かしらのスポーツ、例えば、ラグビー、サッカー、クリケットなどがパブ内の画面に映し出される。この日は偶然にもカーディフで行われる 6ヶ国対抗ラグビー、ウェールズ対イングランド戦が放映されている「だけ」であった。しかし、前述の通りウェールズとイングランドの歴史的なことから、常連客には周知の事実である。そのため、普段よりは画面を見つめる客が多かったと思われる。市内中心部のような派手さはないが、試合を見ながら仲間内で、または、常連客同士で試合の解説や批評をしながらモニターを見ていた。そこは、ウェールズへの思い、スポーツへの思い、ラグビーへの思いが静かにだが確実に感じられる「場」であった。

周縁部のパブは、インターナショナルディの如何に問わず、常連客が集まり、その場で思い思いに時間を共有する場である。市内中心部の賑わいとは異なるが、この場にもラグビーやラグビーにまつわるウェールズとイングランドの関係性の物語を知った人たちが集い、それらを共有していたと推察される。

## 5. まとめ

本調査を通じて、場をデザインするためには人が集まる機会を設けるだけでなく、そこに共有することができる物語が重要であることが見えてきた。

インターナショナルディを第一の目的であるイベントとして捉えた時、このイベントは一度にたくさんの人を集める場を提供することはできる。しかし、それを持続的なコミュニティを形成する場として機能させることは難しい。なぜならこのイベントの参加者は、開催地から遠く離れた場所から来訪し、イベント前後の数日を愉しむために集い、思い思いに過ごしているからである。だが、このイベントに集う人たちは、ラグビーとラグビーにまつわるウェールズとイングランドの物語を共有している。一期一会であってもその場で人びとは時間と物語を共有し、つながりを実感する。これがインターナショナルディを単なるイベントではない証であろう。

一方、インターナショナルディを間接的な目的として捉え、家族、親族、友人と時間を共有している人たちも居ることも明らかとなった。筆者が市内中心部のパブで出会った 20 代の若者は、カーディフ出身であるがウェールズから離れ、イングランドの大学へ進学し、インターナショナルディの機会に合わせてカーディフに帰郷し旧交を温めていた。彼らは直接的にはラグビーを観戦するために戻ってきたわけではないが、ホーム・カーディフにイングランドを 2 年ぶりに迎え入れるこの日を友人たちとの再会の日として選んでいる。彼らの中には、インターナショナルディ、そしてラグビーを「共有する

物語」と了解しているためこの機会を選んでいたのでと推測される。

「(人との) つながり」を創出するためには、参加することに敷居が低く、楽しい雰囲気が重要であろう。地縁型やテーマ型といった確固たる枠組みを有する場ではなく、インターナショナルディのようなラグビーを介した緩やかなつながりを作る場が、大切であろう。そこにある物語を、参加者がそれぞれの解釈で共有することができる場が、つながりを持続させることができる鍵になると考える。

## 付録 (注釈)

- 1) CNAPAN (シナパン) は古来から伝わる原始的な球技である。木片で作ったボールを長時間茹で、数種類の油を塗り、滑りやすくすることで、予期せぬプレーを導き出す。試合は隣町同士で行い、ゴールはそれぞれのまちの教会となっているが、日が暮れたり、疲労のため試合が正しい形で終わることはないと言われる。19世紀後半まで盛んに行われていたが、ラグビーの発展により衰退した。未だにルールが書かれた文献は見つかっていない<sup>3)</sup>。
- 2) 6ヶ国対抗ラグビーに属するウェールズ以外の5ヶ国のスタジアムはそれぞれの国の首都にあり、スコットランド、アイルランド、イタリアで市内中心部から約2~4km、フランスでは約6km、イングランドでは約15kmの距離がある。ウェールズでは500mも離れていない。(筆者調べ)

## 参考文献

- 1) 山崎亮：コミュニティデザインの時代 -自分たちで「まち」をつくる-, pp.13-17, 中公新書, 2012
- 2) 厚生労働省・これからの地域福祉のあり方に関する研究会：地域における「新たな支え合い」を求めて -住民と行政の協働による新しい福祉-, pp9-17, 2008.3.31
- 3) 山崎亮：前掲註1), pp.60-62
- 4) 加山弾, 李代直美：地縁型組織とテーマ型組織の連携に関する研究 -団地住民の NPO 創出および自治会・管理組合との連携を事例として -東洋大学福祉社会開発研究2号, 2009.3
- 5) R. M. マッキーヴァー (中九郎, 松本通晴監訳)：コミュニティ, pp46, ミネルヴァ書房, 1975
- 6) 厚生労働省・これからの地域福祉のあり方に関する研究会：前掲註2), pp9-17
- 7) (公財)草津市コミュニティ事業団 まちづくり振興課, 市民活動団体の課題等に関するアンケート調査結果, くさつ市民活動 虫めがね2, 2013.8
- 8) 浅野悟史, 星野敏, 九鬼康彰：NPO の継続に関わる

- 財務・人材面の課題とその対策 -京都府山城地方における里山保全団体を事例に-, 農村計画学会誌 28 巻論文特集号, 2010.2
- 9) 加山弾, 李代直美：前掲註4)
  - 10) 辻寛, 板倉信一郎, 森栗茂一：合意形成の初期段階における熟議のマネジメント, 第 53 回土木計画学研究発表会・講演集 CD-ROM, 2016-7
  - 11) 浅野悟史, 星野敏, 九鬼康彰：前掲註8)
  - 12) 日本経済新聞, 2016.04.12 : <https://www.nikkei.com/article/DGXMZ0989500Z20C16A3110000> (最終閲覧日：2019年9月27日)
  - 13) The Telegraph, updated July 31, 2014: <https://www.telegraph.co.uk/news/features/11002767/Gen-Z-Gen-Y-baby-boomers-a-guide-to-the-generations.html> (最終閲覧日：2019年9月30日)
  - 14) worldatlas: <https://www.worldatlas.com/webimage/countrys/europe/wales/ukwland.htm> (最終閲覧日：2019年10月3日)
  - 15) A. H. ドット (古賀憲夫訳)：ウェールズの歴史, pp48-50, 京都修学社, 2000
  - 16) A. H. ドット (古賀憲夫訳)：前掲註15), pp pp63-70
  - 17) A. H. ドット (古賀憲夫訳)：前掲註15), pp pp128-154
  - 18) H. Thomas: Discovering Cities Cardiff, pp20, Geographical Association, 2003
  - 19) D. B. Smith and G. W. Williams: Field of Praise - Official History of the Welsh Rugby Union 1881-1981, pp.17-31, University of Wales Press, 1980
  - 20) D. B. Smith and G. W. Williams: 前掲註19), pp.17-31
  - 21) Six Nations HP: <https://www.sixnationsrugby.com/history/> (最終閲覧日 2019年9月24日)
  - 22) Principality Stadium HP: <https://www.principalitystadium.wales/information/facts-and-figures/> (最終閲覧日 2019年9月20日)
  - 23) Six Nations Guide HP: <https://www.six-nations-guide.co.uk/2019/wales-fixtures.html> (最終閲覧日：2019年9月24日)
  - 24) H. Thomas：前掲註18), pp20
  - 25) 松山明子：国のことばを残せるか, pp26-28, 神奈川新聞社, 2015
  - 26) 松山明子：前掲註24), pp21
  - 27) Six Nations Guide HP: 前掲註21)
  - 28) Phil Bennett's pre-game pep talk before facing England., 5 March 1977
  - 29) Sally Kane: The Balance Careers, The Common Characteristics of Millennial Profession, updated May 28, 2019 <https://www.thebalancecareers.com/common-characteristics-of-generation-y-professionals-2164683> (最終閲覧日 2019年9月24日)
  - 30) Produced under the umbrella of KPMG's: Meet the Millennials, "TTS Her Future" Programme, KPMG LLP, 2017
  - 31) D. B. Smith and G. W. Williams：前掲註19), pp18-19

(2019. 10. xx 受付)

## A STUDY OF A FIELD "BA" DESIGN AIMING AT BUILDING IN SUSTAINABLE COMMUNITY

## Hiroshi TSUJI

It is stood out for “people’s networking”, so as to solve social issues which are derived from the falling birthrate, the aging population and depopulation recently. It is also emphasized “BA” (Force Field) to create “networking” in order to increase opportunities for interaction over generations as well as for regional revitalization after natural disaster. Although BA provided continuity and sustainability turns into “community”, neither indigenous nor themed communities fulfill both continuity and sustainability.

It is made an attempt in this paper to contribute a design of “BA” for sustainable community through observing not only an atmosphere of Cardiff, Wales on International Day of Six Nations Rugby match but also rugby of the Welsh to create “BA” for networking.